様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１４０

研究課題名（和文）アルカディアのイメージ世界：ピエル・ヤコポ・マルテッロと視覚芸術

研究課題名（英文）The Imagery World in Arcadia: Pier Jacopo Martello and the Visual Arts

研究代表者
高橋　健一（TAKAHASHI, Kenichi）

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０３７２６７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　劇作家、詩人のピエル・ヤコポ・マルテッロ（ボローニャ、1665―1727年）は、美術批評でも注目すべき言説を遺した。また彼は、新しい演劇上演を模索しつつ、画家に図像プログラムを提供し、自著には豊かな挿絵を用意している。本研究は、一連の事業の考察をとおし、その眼差しの再構成を試みた。
　マルテッロは文学アカデミー「アルカディア」に属した。1690年ローマ設立の同会では、ペトラルカ主義の再興による「良き趣味」の確立が目指されている。その文脈にあって、マルテッロはバロックの遺産をも尊重する中庸的態度で際立っていた。彼の活動の理解は、同時代イタリアの美術と文化に新たな光を当てると信じられる。

研究成果の概要（英文）：Dramatist and poet, Pier Jacopo Martello (Bologna, 1665-1727), also left noteworthy statements in the arena of art criticism. He investigated a new method of theatrical representation, offered iconographic programs for contemporary painters, and prepared rich illustrations for his books. Through an examination of these projects, this study attempted to reconstruct his gaze.
 Martello belonged to the Accademia dell’Arcadia. This academy of literature, founded in Rome in 1690, aimed for the establishment of “Good Taste” by restoring Petrarchism. In this context, Martello was distinguished by his moderate attitude as he also respected the heritage of the Baroque. It is believed that an understanding of his activities may cast a new light on the art and culture of contemporary Italy.

研究分野：美術史

キーワード：アルカディア　バロック　ボローニャ　ムラトーリ　リッコボーニ　望遠鏡　挿絵　パルナッソス

１．研究開始当初の背景

ラテルツァ社の「イタリアの著述家」のシリーズはピエル・ヤコポ・マルテッロの『演劇』に計 3 巻を当てる。その大部の版本には、この劇作家の豊かなレパートリーがみられよう。フランス演劇の翻訳・紹介にも努めたマルテッロは、とくにラシーヌに傾倒して、アレクサンドランを模倣した 14 音節の詩句を創案、劇作品で実践した。これは彼の名をもとに「マルテッリアーノ」と呼ばれている。一方で彼は、ミルティロ・ディアニディオの渾名でアッカデミア・デリ・アルカディ（以下アルカディア会と表記）に参加、そこを舞台に詩人・散文作家として活躍した。1708 年から 10 年間ローマに滞在したマルテッロは、最盛期のアカデミーをその重要会員として支えている。

17 世紀末のイタリア文化はかつての威信を喪失しつつあった。イタリアの学問芸術は、表現の非合理性、つまりそのバロック的な傾向、レトリックの過剰のために、批判というより嘲笑を、とくにフランスから浴びせられていたのである。この危機的状況を前にして、1690 年のローマに結成された文学アカデミーが、アルカディア会に他ならない。ここで団結したイタリア人たちは、先進国をモデルとして、自らの趣味の改良に取り組もうとした。しかし、詩すら散文で書くフランスのデカルト的合理主義に、彼らが公に与することはなかった。基本的にアルカディア会は、蔓延するマリーノ主義を排してペトラルカ主義の再興を目指すことを、活動方針に掲げていく。

アルカディア会で醸成された新しい「良き趣味」が 1700 年前後のイタリアでは視覚芸術にたいする人びとの眼差しをも決定づけていたと論じたのは、『バロックの死と良き趣味のレトリック』（2006 年）の著者ヴァーノン・ハイド・マイナーである。実際アルカディア会は、自らと同じ道を美術にも望んでいた。その会員たちは、同時代そして過去の美術に彼ら独自の意味を与え、また来るべき変化を促そうと、試みていたのである。アッカデミア・ディ・サン・ルカと定期的に共同事業に当たったアルカディア会は、その理論形成に大きな影響を及ぼしていた。カルロ・マラッティやフランチェスコ・トレヴィザーニらを単に「バロケット（小バロック）」と形容する従来の美術史研究に、ハイド・マイナーの論考は一石を投じるものであった。

とはいえ、視覚芸術にたいするアルカディア会の態度を、ハイド・マイナーが適切かつ十分にとらえているとは言い難い。彼はそれを素朴な牧歌趣味に還元してしまう嫌いがある。その理解はアルカディア会の創設者のひとりジョヴァン・マリオ・クレッシンベニを重視したことに由来するが、ヤコポ・サンナザーロの世界をモデルとしたクレッシンベニの羊飼いごっこには、ジャンヴィンチェンツォ・グラヴィナやルドヴィコ・アントニオ・ムラトーリのように嫌悪感をあらわにする会員も少なくはなかった。グラヴィナはこの問題を理由のひとつにしてアカデミーを離脱することになる。私たちは他にモデル・ケースを探すべきだろう。

ピエル・ヤコポ・マルテッロは注目に値する。フランス文化にも好意的であることを隠さず、マリーノ主義にも寛容という立場をとっていた彼だが、アカデミー中枢部とはつねに良好な関係を維持し、詩作においては真にペトラルカ主義的であった。そのマルテッロは、たとえばグイド・レーニの「第二の様式」に、特別な意義を認めている。ラファエッロ的「優美さ」や対抗宗教改革的「敬虔さ」で愛されたレーニは、1630 年頃からその様式に移行する。「第二の様式」とは、「銀白色の様式」とも呼ばれたもので、白を多く含んだ淡い色をすばやく粗いタッチで配することで、下塗りの露出した未完成とも誤解される画面をつくりだしていた。レーニの最良の理解

者を標榜した 17 世紀の美術史家マルヴァジアも、それは積極的には評価できていない。その様式からなる画家晩年の作品に、彼は「弱々しい」という形容詞を当てざるをえなかった。一方でマルテッロは、簡潔でありながら古典的とはいえないレーニの「第二の様式」の画面を、ペトラルカの叙情詩とも比較しながら、「デリケートさ」において称讃したのである。

この感性が時代を代表してふさわしいと考えた報告者は、マルテッロの美術論について研究をすすめ、このグイド・レーニ評の問題について論文をまとめた（『Intersezioni』誌（第 35 号、2015 年、第 3 冊）に掲載）。マルテッロはその批評に「デリケートさ」の他にも「明瞭性」といった用語をもちだしている。「アルカディアのグイド・レーニ：Ｐ・Ｊ・マルテッロの眼差しの詩学」と題されたこの論文では、それらが彼の修辞学で担う概念を規定することで、詩人の眼差しの再構成を試みている。その成果を足がかりに、マルテッロの業績についてより広く調査をおこない、彼が抱いていたイメージ世界を描きだしたいと考えた。

２．研究の目的

具体的には、マルテッロが関係した以下の事業に注目し、その内実と特質を明らかにすることを目指した。

（１）画家ヴォットリオ・マリア・ビガリがボローニャのパラッツォ・ラヌッツィのギャラリーに実現したフレスコ画。この図像プログラムはマルテッロが作成したと言われ、彼に帰されるその「第一案」が写しを介して読まれる。しかし「第一案」と完成作のあいだには違いが認められる。その図像の生成におけるマルテッロの役割と意図について考察する必要があった。またここでのビガリの様式ないしモードの選択にマルテッロが与えた影響について検討したいと考えた。

（２）マルテッロの版本の挿絵。マルテッロは自らの版本に多くの挿絵を用意した。それらは図像自体の性質でも使用方法でも他に際立っている。その着想の原因を様々なレヴェルで探りたいと考えた。またあわせて、フランチェスコ・アクイラらの版画家との共同作業の実態について解明することが求められた。

（３）マルテッロの演劇の上演。その舞台そのものの再構成は、資料の欠如から極めて困難ながら、マルテッロの演劇論『新旧悲劇論』（1715 年）には、上演にたいする彼の理想が示されている。他の材料も参考にしながら、その考えを整理して時代の文脈に位置づけたいと考えた。

報告者は、この本研究事業の申請と相前後して、マルテッロの建築論・理想都市論について考察し、得られた知見を「アルカディアのポルティコ――ピエル・ヤコポ・マルテッロの理想都市『ポエジロゴポリ』とイタリアの文芸共和国――」と題した論文のかたちにまとめていた（『美術史学』誌（第 36 号、2015 年）に掲載）。マルテッロの美術批評についても補完的な調査・研究をおこなったうえで、一連の成果を体系的な本としてまとめることを構想した。

３．研究の方法

まずはヴォットリオ・マリア・ビガリのフレスコ画について研究をすすめた。これが描かれるボローニャのパラッツォ・ラヌッツィは現在ボローニャの裁判所として使用されている。特別に許可をえて同所を訪問し、作品を細部まで観察のうえ写真を撮影した。マルテッロが作成した図像プログラムの「第一案」の写しは、すでに別の研究者により翻刻・公刊されていたが、ボローニャ国立古文書館に所蔵されるそれを直接参照した。その文書が収められるラヌッツィ文庫は膨大で、なかには有益な情報が含まれているので、時間の許す限りで確認した。このギャラリーのフレスコ画では、ラヌッツィの封土だった温

泉地帯ポッレッタ（ボローニャとピストイアの中間に位置）とパルナッソスが並列される。その画面のパルナッソスには医神アスクレピオスが登場してアポロンをポッレッタに誘導する。その図像の視覚的・文学的典拠を探した。また、このフレスコ画装飾の形式は、直接にはジュゼッペ・マリア・クレスピによるパラッツォ・ペポリのものに由来するといわれるが、ピッティ宮殿のピエトロ・ダ・コルトーナ作品にも同様のものが認められる。さらに近い事例がないか調査した。

一方で、マルテッロの版本挿絵について調査・研究をおこなった。各図像の機能について理解するには、マルテッロの文学・批評作品自体の内容との比較が欠かせない。そのためまずはそれらの精読をおこなった。また、マルテッロと共同したフランチェスコ・アクイラ、フランチェスコ・マリア・フランチャらの版画家たちの業績を知るために、ボローニャ大学図書館やローマのグラフィック美術中央研究所にて作品調査をおこなった。と同時に、マルテッロの時代の版本挿絵の一般的状況についても知見を広め、また、同時代の出版文化について考えを深めた。とりわけローマのフランチェスコ・ゴンザーガ、ボローニャのレーリオ・ダッラ・ヴォルペという、マルテッロ本を扱った二人の出版業者については、先行研究をもとにその活動の全容把握に努めた。

さらに舞台上演についての研究を進めている。まずはマルテッロの『新旧悲劇論』を精読し、舞台上演に関するその考えを整理した。この悲劇論には複数の版本があり、なかでも 1714 年のパリ版は稀少だが、それらを参照、比較して異同を確認した。マルテッロと共同で舞台づくりに当たった役者にルイージ・リッコボーニがいる。演劇史家・理論家として多くの著作を遺したリッコボーニの考えを確認することで、二人の接点を探った。

と同時に、将来の総合に向けた準備を進めた。具体的には、マルテッロの美術論について、補足的な調査をおこなっている。1720 年代に刊行されたマルテッロの『著作集』に美術作品を詠んだ作品を探して翻訳・分析した。報告者は、前述の論文でマルテッロの未公刊のグイド・レーニ主題作品の手稿（ボローニャ大学図書館所蔵）を紹介、テクストを翻刻している。それ以外にも、例えば、ボローニャのカルドゥッチ図書館には、画家ベネデット・ジェンナーリを扱うマルテッロの詩作品の未公刊手稿を見いだしたので翻刻した。ローマのアンジェリカ図書館（現在のアルカディア会はここに拠点を置いている）には、マルテッロの同アカデミーでの活動をしめす文書が遺されているので参照した。

４．研究成果

ビガリのフレスコ画については、ボローニャ国立古文書館での調査の結果、注文の文脈を正確に示す未公刊の文書が見いだされ、また、図像については、ピンダロスの『ピュティア祝勝歌集』との比較をもとに、新たな読みの方法が得られた。これらの成果は、美術史学会全国大会での口頭発表を経て論文にまとめられ、アルカディア会の紀要（『Atti e memorie dell’Arcadia』）に公刊された。

マルテッロの版本の挿絵については、大きな新発見こそ得られなかったものの、一点一点を詳細に考察し、得られた知見をもとに、全体としての傾向を見積もった。これらの作例にはマルテッロの詩学そのものとの強い親和性がみられている。そして、同時代の版本挿絵、出版計画の諸事例との比較において、マルテッロの事業の特異性、先駆性を明らかにした。この研究成果は、論文にまとめられ、書誌学の専門誌『Paratesto』に公刊された。

しかし、マルテッロ劇の上演に関する研究は思うようにはかどらなかった。前提となる演劇史の研究には膨大な蓄積があるが、報告者はそれらをいまだ十分には消化できてい

ない。しかし、イタリアでの調査の過程で、マルテッロとルイージ・リッコボーニの関係を示すきわめて重要な新資料をすでに確保してある。準備が整い次第、これを活かして、論文の執筆にかかりたいと考えている。

一方、本研究は、開始当初予想しなかった成果を生んでいる。マルテッロの牧歌的物語『イエスの目』の読解の過程で、そこにみられる着想が、ボローニャの画家ドナート・クレーティの《天体観測》八連作（ヴァティカン絵画館）に結び付くことが分かった。同連作は、マルテッロの盟友で天文学者・詩人のエウスタキオ・マンフレディの図像プログラムにもとづいて実現したことがすでに知られていた。それにたいし、ボローニャ国立古文書館で調査をおこなったところ、より詳細な初期の来歴が判明している。これらの知見をまとめた論文が、美術史の専門誌に投稿されて現在査読中である。同論文の内容は、その投稿に先立ち、美学会全国大会で口頭発表されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①Kenichi Takahashi, *Una costellazione in Arcadia. Le illustrazioni dei libri di Pier Jacopo Martello*, 《Paratesto》, 14, 2017, pp. 47-69.［査読有り］（論題邦訳：「アルカディアの星座：ピエル・ヤコポ・マルテッロの本の挿絵」）
②Kenichi Takahashi, *Pindaro in Arcadia. Pier Jacopo Martello e Vittorio Maria Bigari nella galleria di Palazzo Ranuzzi in Bologna*, 《Atti e memorie dell’Arcadia》, 5, 2016, pp. 233-270.［査読有り］（論題邦訳：「アルカディアのピンダロス：ボローニャ、ラヌッツィ館のギャラリーにおけるピエル・ヤコポ・マルテッロとヴィットリオ・マリア・ビガリ」）

〔学会発表〕（計　2　件）
①高橋健一「アルカディアの望遠鏡――ドナート・クレーティの《天体観測》をめぐる新しい提案――」第 68 回美学会全国大会、2017 年 10 月 7 日、國學院大學
②高橋健一「アルカディアのピンダロス――ヴィットリオ・マリア・ビガリのボローニャ、ラヌッツィ館ギャラリー天井画におけるピエル・ヤコポ・マルテッロの詩的創意――」第 68 回美術史学会全国大会、2015 年 5 月 24 日、岡山大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋 健一（TAKAHASHI, Kenichi）
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号：70372670

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)